

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★

## ドッペルゲンガー

配給/アミューズピクチャーズ

2003 (平成15) 年9月25日鑑賞

<東宝東和試写室>

Data

監督: 黒沢清

出演: 役所広司/永作博美/ユース  
ケ・サンタマリア/柄本明

### 👁️👁️ みどころ

ドッペルゲンガーとはドイツ語の「Doppelgänger」。自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種。自己像幻視。そしてドッペルゲンガーを見たものは数日のうちに必ず死ぬといわれている。役所広司が、死の影をちらつかせる自らの分身ドッペルゲンガーとなって初の1人2役に挑戦。お相手は、あの大人気女優ながら映画初出演の永作博美。人間性の奥深い面に踏み込みながらもコミカルな面をうまく取り入れた秀作。2003年10月2日からの第8回釜山映画祭(韓国)でのオープニング上映も決定。大いに期待される・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <ドッペルゲンガーとは?>

ドッペルゲンガー「Doppelgänger/ドイツ」とは、自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種。自分像幻視。ドッペルゲンガーを見たものは数日のうちに必ず死ぬ、といわれている。

会社に勤め、人工人体の開発研究に情熱を燃やす早崎道夫(役所広司)は、スランプで毎日イライラ。10年前の血圧計開発の大成功で、会社を大儲けさせただけに、わがまま放題の研究を続けさせてもらっているが、それを支えるのは、早崎を天才と認める、友人であり部長の村上(柄本明)。しかし思うように研究が進まない。そんな早崎の前に、ある日、早崎の分身であるドッペルゲンガーが現れ、研究に協力しようと申し出た・・・。

#### <OLの由佳にもドッペルゲンガーが・・・>

永井由佳(永作博美)はOL。

弟の隆志と一緒に住んでいる。ところが「弟が自殺した」と警察から電話があった。「何

かの間違いです！」と由佳は叫ぶが、隆志が死亡したのは事実。由佳が見た隆志は、実は隆志のドッペルゲンガーだったのだ。ドッペルゲンガーの隆志との奇妙な共同生活を続ける由佳は、このことを早崎に相談。2人のドッペルゲンガー対策(?)が始まった。

### <1人2役に挑戦!>

パンフレットによると、「企画の発端にあったのは、役所広司さん主演でとにかく面白い映画を作ろうというプロデューサーの提案だった」とのこと。

従ってホンモノの早崎とドッペルゲンガーの早崎との対立、矛盾、ケンカ、挙句の果ての「ドッペルゲンガー殺し」という筋書きがメインだ。ホンモノの早崎は優秀な研究者で、善良な人間だが、その分身たるドッペルゲンガーは結構「ワル」。人工人体の開発・完成は、金、地位、名誉。そしてオンナに結びつくとホントに考えている。そしてそのためには強盗、人殺しも平気。由佳に対しても襲いかかっていくひどい男。

当然、早崎はそんな自分の分身であるドッペルゲンガーを認めたくないが、目の前に現れて対話をしたり、お金や資料、そして助手の君島(ユースケ・サンタマリア)の提供までしてくれるのだから、イヤでも付き合わざるを得ない。

もっとも、由佳の弟のドッペルゲンガーは、いわば早崎のドッペルゲンガーの話に「真実味」をもたらすための、サシミのツマとして使われているだけ。本作の見どころは、あくまで役所広司が1人2役で演ずる早崎とそのドッペルゲンガーとの「対決」というストーリーだ。

### <映画初出演の永作博美、そして柄本明、ユースケ・サンタマリアの好演>

テレビの大人気者で、私の大好きな女優、永作博美が映画初出演。弟のドッペルゲンガーと付き合ったり、早崎のドッペルゲンガーと付き合ったりという変な役をうまく演じている。

柄本明は相変わらずの名演技で、ストーリー展開にうまく幅を持たせている。柄本演ずる村上部長のドッペルゲンガーは現れないものの、村上自身が会社をクビになった後、人間が豹変してしまうから、これも1人2役みたいなもの。

早崎の助手の君島として登場するユースケもケツタイなヤツであるうえ、かなりの悪党。「助手」から早崎の研究の「パートナー」にしてもらったと単純に喜んでいたら、早崎のドッペルゲンガーを殴り殺そうとしたり、完成した人工人体を金で買おうとした村上を平気で殴り殺してしまうような冷血な面をもっている。こいつも1人2役みたいなものだ。

### <総評>

最近の映画には、ややこしい世相を反映してか、「多重人格者」『アイデンティティー』

03年)とか、「死の予知能力」(『デッドコースター』03年)とか、「隔離」、「実験」、「魔女」、「異次物」(『ALIVE』03年)とか、「脳移植」(『天使の牙』03年)のややこしいテーマが多い。

この『ドッペルゲンガー』もその1つ。いわば、現代版『ジキル博士とハイド氏』だ。従って深く考えれば、いくらでも「悩ましく」が「深刻」になってくるが、この作品は意外にサラッと人間の二面性を描いているし、恐いストーリーでありながらユーモアをうまく交えているので、素直に観ることができる。そして当然のことながら、役所広司の1人2役の演技は見事。

2003年10月2日からの第8回釜山映画祭(韓国)でオープニング上映されるとのことだが、結構人気を博するのでは・・・。

2003(平成15)年9月26日記